

シュテファン・ハイム小伝（2）

貫橋 宣夫

1941年、チャーチルとローズヴェルトは「大西洋憲章」に署名した。憲章は、将来の平和の基礎となる民主主義の諸原則を宣言するものであった。ほどなくソビエトなど15カ国が支持を表明した。ドイツはアメリカに宣戦布告をした。アメリカはヨーロッパとアジアの両方で、全面的に第二次世界大戦に突入した。

ハイムは、地方新兵徴募委員会から軍隊へ行くようにとの1943年1月25日付の命令書を受け取った。

軍隊で彼は新人教育を受けた。服装の整え方、持ち物の整理の仕方、荷造りの仕方、ベッドの作り方などである。「ベッドのカバーはピンと張っておかなくてはならなかった。この上に25セント硬貨を落とせば、少なくとも3インチは跳ね返る程度に」とハイムは振り返っている。

こうした知識を習得したのち、彼は初めて銃を手にした。モデル・スプリングフィールド98である。この銃は一回の弾薬の装填で2発の銃弾を発射することができる。ハイムは身震いを感じた。ファシストに素手で対峙しているのではない。彼は撃ち返すことができるのだ。

そのうえ、彼はもはやひとりではない。自分の側にはたくさんの仲間がいる。軍隊生活はハイムには忘れることのできない体験となった。何のために、いつ、誰に向かって撃つのか明らかであった。この体験によって、自分が所属している軍隊のみならず、軍隊一般に対する関係も明確に意識化することができた。

上級下士官が尋ねた。「この軍隊ではいったいどう感じるかね？ 幸福かね？」ハイムは答えた。「私は十年間、ほとんどひとりでヒトラーと戦ってきた。自分の側に二百万人の味方をもっているいま、私はどう思ったらいい

のかい？」

このころ、ハイムはアメリカのスパイ組織によって密かに調査されていた。後年、ハイムが入手した資料には次のように記されていた。「情報提供者によれば、当該人物は婦人の集まりのなかにいることを楽しんでおり、彼より十五歳年上のゲルトルーデ・ゲルビン夫人と長時間過ごしている。当該人物は、本当は三十歳だが、外見では十歳は老けてみえる。彼が伴侶にこのような婦人を選んだことの説明になるかもしれない」。また、別の情報提供者の意見も加わる。「ゲルビン夫人は明らかに共産主義者である。彼女は積極的に、カーネギーホールで行われる「第二前線」のための催しで、オール・ロシア・プログラムの準備にかかわっている。この催しには喜劇役者チャーリー・チャップリンが山場で登場する。ゲルビン夫人は当該人物にこの集会に参加するよう説得した」。

ワシントンの参謀本部のスパイG-2は、1953年10月23日に FBI 所長に対し、ハイムは1943年4月から6月にかけて情報部員によって調査されたと報告している。1953年といえ、ハイムがアメリカを去って、東ドイツに移住した後のことである。報告書は、ハイムはすでにアメリカにくる前に共産主義者であった、その根拠は、周知の共産主義者であるエゴン・エルヴィン・キッシュがハイムを「同士」と呼んでいるからだとしている。こうして集められた情報が分析され、情報部員によって組み立てられたハイム像は次のようである。ハイムは誠実、率直、知的、明晰であり、物事を前もって見通す能力がある。野心的、エネルギーが豊富であり、自己描写の才能がある。年齢に比して非常に成熟している。常に被抑圧者の側にいる。目標に関わるとなれば、達成能力がある。反ナチスは絶対的である。エゴイステイックではあるが、状況を判断し、矛盾を避けることができる。

ハイムは小説家として知られるようになっていた。しかし、本名は依然としてヘルムート・フリークであった。本名とペンネームの使い分けは生活上の煩わしさをともなった。

彼は判事のもとに赴き、申請し、宣誓した。

市民権も正式に取得した。こうして、アメリカ国籍を持つアメリカ市民、シュテファン・ハイムが誕生したのである。アメリカは彼には新しい故郷と

思えた。

ペンシルベニア州南部のゲティスバーグは南北戦争の激戦地として有名である。そこに第二ラジオ放送会社が出現した。集められたスタッフには、哲学教授、言語学者、作家、ジャーナリスト、作曲家、映画・演劇人などがいた。すべてのものがドイツ語に堪能であり、多くの者が捕虜尋問者としての訓練を受けていた。ドイツ侵攻への準備であった。

この集団を掌握していたのは、第一大尉ハンス・ハーベであった。ハーベはもともとハンガリー出身のユダヤ人で、ジャーナリスト、作家であった。1939年にドイツ軍に捕らえられたが、逃亡に成功し、アメリカに渡った。1941年に出版された体験記『一千人が死ぬ』(A Thousand Shall Fall)は大きな成功をおさめ、対ヒトラーに対するアメリカ参戦へのひとつの契機となった。ハイムとよく似た経歴、志向の持ち主だった。彼は教育係も兼ねていた。

彼は特殊な任務を与えられたスタッフに対して講義した。砲兵隊によって敵兵に撒かれるちらしの作り方、飛行機から敵地に撒くちらしの書き方、短い、あるいは長い放送原稿の書き方、放送の仕方、新聞の作り方など題目は多岐にわたった。敵に考えさせ、効果をあげる宣伝の原理と方法について、ハーベは心理面から解明し、明確な定式化を行った。ハーベの話しぶりは人を魅了した。受講者たちの注意力が散漫になることを許さなかった。

ハーベが心理戦争の遂行においてアメリカ軍に大きな貢献をしたことは疑いない。

彼はハイムの人生に大きな役割を果たすことになる。

1943年2月、ドイツはスターリングラードの戦いでソ連軍に大敗北を喫した。この戦いで死傷したり捕虜となったドイツ兵の数は150万人にのぼったといわれている。連合国側は戦いを有利に進めていくことになった。

連合軍は北フランスから大規模な上陸作戦を実行した。スターリングラードの戦いから1年4ヵ月後のことである。ノルマンディー上陸作戦である。ハイムはハーベとともにこの作戦に加わった。ヒトラー暗殺計画があったのは1944年7月20日のことであった。

ルクセンブルク大公国はドイツ占領状態から解放され、アメリカ軍の支配下におかれた。幸いなことにルクセンブルクの大きな放送局は破壊を免れて

いた。この放送施設を使えば、ドイツの奥深く電波を送り届けることができる。

フランス中部のルマンにいた上級下士官ハイムはルクセンブルクに緊急な呼び出しを受けた。この間に部隊長に昇進していたハンス・ハーベが目の前にいた。彼はハイムに要請した。「前線新報」も宣伝ちらしももちろん作ってもらわなくてはならないが、何といたってもドイツ軍に、ドイツ人に向けた放送をやってもらわなくてはならない、と。

新しい任務はハイムが亡命を余儀なくされて以来、待ち望んでいたものだった。彼がプラハの仲間にした反戦詩もアメリカ国内で発行したドイツ語新聞の記事も、ドイツ本土のドイツ人には間接的にしか届けることはできなかった。何という運命のめぐりあわせか、いまや直接ドイツ兵に、ドイツの人々に語りかけることができるのだ。何百万人という単位で。ハイムはドイツの兵士に、そしてドイツの国民に戦争の無意味さを説き、抵抗運動に声援を送った。

彼は仕事部屋の壁にゲッベルスの肖像写真を貼り付けた。ゲッベルスはナチスの宣伝担当者として、大衆の心と感情を思うがままに操っていた。ハイムが対抗心を燃やしたのも当然うなずけるところである。ドイツ人の心をうつよい言い回しを思いついたとき、彼は語りかけた。「うまく言えたかな、ドクトル？」。

ある夜のことだ。ハイムが仕事をしていると、部隊長ハーベがイギリスの戦闘服を着た男を連れてきた。リチャード・クロスマン、雑誌「新しい政治家」の編集長で、労働党内閣の大臣、前線ではハーベと同様の任務を遂行していた。

ハーベとクロスマンは、英米両軍によって占領されるはずの地域の報道区分を決めようというのであった。

取り決めを行うにあたって、ドイツの事情に詳しいハイムが呼ばれたというわけである。地図を前にして彼らは、どの都市をとるか、どういう方法で境界をつけるかなどについて話しあった。

これほど重大なことが、これほど簡単に決められることにハイムは信じられない思いであった。

このときは、将来発行することになる新聞の名前も考えた。ハイムはエッセン（ノルトライン・ヴェストファーレン州にあるルール工業地帯の中心都市）向けに「ルールのこだま」はどうだろうと提案したが、同名の新聞が同じ地域で共産主義者によって発行されていることに気づいた。共産主義者の新聞名をアメリカ人が引き継ぐのはやりすぎだということで提案を引き下げた。

ハイムはちらしやラジオ放送用原稿を起草し、ドイツ人捕虜の尋問を行った。

1945年4月、ベルリンはソ連軍に包囲され、陥落した。ヒトラーはベルリンの地下壕で自殺した。5月の7日から9日にかけて、ドイツはアメリカ軍とソ連軍にそれぞれ降伏した。

ハイムは生まれ故郷のケムニッツに入った。アメリカの勲章とアメリカ軍の階級章のついた制服をまとい、アメリカの軍用車に乗って。交差点には停止指示棒と自動拳銃をもったロシア人の若い女が立っていた。街は空襲で破壊され、新しい制服を身につけた元ドイツ兵が警察の監視の下に瓦礫を取りのぞいていた。

ハイムが家族と生活をした建物はホフマン通りに立っていたが、壁に巻きついた野生の葡萄は焼け、壁には弾丸の跡があった。住居には鍵がかかっていた。彼は呼び鈴を鳴らしたが、もちろん応える者はなかった。

ハイムが生まれたカイザー広場に面した家は前壁だけが残っていた。彼はこの入り口で何枚も同僚に写真を撮らせた。

彼はギムナジウムへも行ってみた。建物は野戦病院として使われていた。ホールをとおり、かつての教室にも入った。反政府的な詩を書いたために級友から受けた暴行、ユダヤ人であったがための侮蔑、校長の退学命令。青年時代のいくつかのシーンが彼の脳裏をよぎった。

彼は墓地へも赴いた。彼はアメリカに渡ってきた母からおおよその位置は聞いていた。母は大きな平らな石で父の墓を覆わせたという。ベルリンのゲットーへ行かなければならなかった母の、最愛の夫への最後の思いやりだった。ハイムは墓を見つけることができなかった。ナチは墓碑銘を下に墓石をひっくり返していた。

1948年に小説『十字軍戦士』(The Crusaders)が完成し、ハイムは再び成功をおさめた。西ドイツではこの小説は『無念の栄冠』(Der bittere Lorbeer)というタイトルで出版された。ハイムはこの小説によって、現代の歴史をジャーナリスティックに把握し、センセーショナルな効果も損なわない語り手として西ドイツでも確かな地位を得た。ハイムは、「このテーマについて長く探する必要はなかった。生活が自分にテーマを与えてくれた」と述べている。

ハイムはその後、アメリカの上級下士官として、ついで第二大尉として、ハーベの指揮下で働いた。主として放送、出版界で活躍したのである。ミュンヘンの「新新聞」の編集部でエーリヒ・ケストナーに出会った。ケストナーはすでに1920年代の終わりには詩人として、少年小説『エーミールと探偵』、『点子ちゃんとアントーン』などで有名になっていた。ハイムはケストナーの作品を読み、親しんでいたのであった。戦争中、ケストナーの詩集と小説『ファービアン』は、ドイツ民族を汚す非道徳的な本であるという烙印を押され、焼かれた。ケストナーは亡命しないでドイツに踏みとどまった数少ない作家である。

この時期に書かれた放送用原稿、記事等は、後年、『敵への演説』(Reden an den Feind)というタイトルで発刊された。

そうこうするうちに、ハイムはアメリカの占領政策に疑問をもつようになった。アメリカの反ファシズムの原則が首尾一貫したものとは思えなくなってきた。ハイムは「新新聞」の反ソビエト路線をめぐってハーベと対立するようになった。ハーベは後に出版資本のシュプリングラーの右翼コラムニストになった。

ハイムはアメリカに戻った。しかし、アメリカ本国でも彼を隠れ共産主義者、あるいは公然共産主義者だと攻撃する新聞も現われた。

反ファシズムで一致してドイツと戦ったアメリカとソビエトが、戦後処理の過程で意見を異にし、対立するようになった。ハイムはそのことを残念に思った。

このころ、アメリカでは上院議員のマッカーシーが、アメリカ国内に国益を裏切った共産主義者がいると主張して、「赤狩り」に乗り出していた。ハ

イムは、マッカーシー旋風に駆り立てられる不安を感じた。

こうして新たな亡命となった。今度は西から東へ。そのさい、予備役軍人として朝鮮戦争に召集されるのではないかという不安もこの行動に一役買っている。

ハイムは亡命先をチェコスロバキア社会主義共和国か、あるいはポーランドにしようと努力したが、失敗に終わった。ハイムはワルシャワで劇作家のフリートリヒ・ヴォルフに推薦人になってもらい、東ドイツの大統領ヴィルヘルム・ピークに手紙を書いた。アメリカで自分が置かれている状況を訴え、東ドイツの保護を求めたのである。

1951年にハイムは妻とともに東ドイツに移住した。ベルリンのグリューナー地区の家に入居した。この家の住居人は東ドイツを捨て、西ドイツに移住したばかりであった。

本稿はStefan Heym, “Nachruf”, München, 1988に多くを負っている。

参 考 文 献

Stefan Heym, “Nachruf”, C. Bertelsmann, München, 1988

Stefan Heym, “Wege und Umwege”, C. Bertelsmann, München 1980